仮設住宅で交流の場「たまり場　こらんしょ ふたば」を開催

双葉町の皆さんへの支援がきっかけ

　さいたまコープの村田敦志（むらた　あつし）さんに、郡山市の仮設住宅の支援に協力することになったいきさつをお聞きしました。

「双葉町の方々とは、昨年４月から埼玉県加須市の旧騎西高校に避難された双葉町のみなさんに炊き出しなどの支援を行なってきました。昨年の９月頃から、福島県内の仮設住宅に移る方も多くなり、双葉町から仮設住宅での交流の場への協力依頼もあり、コープふくしまの皆さんが各地の仮設住宅で交流の場『たまり場　こらんしょ』を行まっているのを知り、ぜひ、お手伝いさせてほしいとお願いしたものです。今日の『たまり場　こらんしょ』では、埼玉県に避難されていた方々にも会うことができ、話が盛り上がってしまいました」

　コープふくしまの生活文化グループで郡山市を担当している松崎美智子さんは、今年の３月からさいたまコープと一緒に支援の打ち合わせを始めたといいます。

「地元の生協で準備できるものは引き受けましょう、と話し合いました。４月 14 日に、はじめてさいたまコープと一緒にカレーうどんの炊き出しをしました。避難されたお菓子屋さんが、埼玉でお菓子づくりを再開し、そのお菓子を取り寄せて、お茶会で双葉町の方に振舞うと、『いつも食べていたお菓子だ、懐かしい』と喜んでもらえました。また、さいたまコープの事務局と連絡を取りあって、地元で出来ることなどの分担をしました。炊き出しの次はお茶会をする事になりました」と言います。

　さらに、松崎さんは、「私たちのこのような支援活動は全国の生協の皆さんに支えられているんだと、心強く感じています。さまざまな形での支援は、本当にうれしいし、ありがたい」と言います。生協の仲間との経験交流には、物資の支援とは異なる特別な意義があるようです。

　この日も、日本生協連が主催した被災地支援の全国交流会をきっかけに、コープしずおか「吊るし飾りを贈る会」から送られた「吊るし雛」を、仮設住宅に住む双葉町自治会長に手渡し、集会場に飾りました。また、コープふくしまが 20 年以上の取り引き先である愛知県（有）小川水産から支援物資として送られたシジミをみそ汁にして食べて頂き、また、お土産として配りました。

　お茶会に３回連続して参加したＹさんは、「和気あいあいと話ができるので、私らにはとても良い集まりです」と楽しそうにいいます。埼玉県の借り上げアパートにいて、去年の８月にこの仮設住宅に移ったそうですが、「美味しいお菓子をいただき、話が弾んでみんなの役に立っています」喜んでいました。

心を寄せあう事を大事にしたい

　初めて「たまり場　こらんしょ　ふたば」に参加した、さいたまコープ組合員理事の新井ちとせさんは、「これから継続して、コープふくしまの皆さんとさいたまコープが仮設住宅に住む双葉町の皆さんと心を寄せあうためには何ができるのだろう。その答えを見つけ

に来ました」と今回の目的を語ってくれました。そして、「そこで今回は大きなイベントをする企画屋になるのではなく、①仮設住宅の方々のお話を聞くこと、②コープふくしまさんの活動をサポートすることを大切にすることを、参加メンバーで確認し、まずは組合員活動の得意技である『商品を真ん中に』交流しようということになりました」と言います。

用意したのは「CO-OP 切れてるパウンドケーキ」と「CO-OP 季節のパウンドケーキ抹茶あずき」の 2 種類です。切れているので衛生的で手間いらず。甘すぎないので老若男女問わず好評でした。男性の参加者とも「『お菓子はおいしいですか？』と話し掛けたのをきっかけに少しずつなごみ、避難の様子や地震の前にしていた仕事のことなど、心の内を話し盛り上がりました。

交流の場『たまり場　こらんしょ』の様子。
コープ商品のお菓子などを食べながら会話がはずむ。

「商品を真ん中にして、お茶を飲みながらわいわい世間話をして、『今日は楽しかったよ』と言って帰っていただけるような関係をつくっていけたらいいなと思いました」と、新井さんは、今後の取り組みのヒントを見出したようです。